

# 注目のキーワード「MaaS (Mobility as a Service)」

最近、ニュース等で「MaaS(マース:Mobility as a Service)」を目にする機会が増えていています。直訳すると「サービスとしての交通」という意味ですが、MaaSはマイカー以外のすべての交通手段を、ITを駆使して1つのサービスとしてとらえ、シームレスにつなぐ新たな「移動」の概念です。2015年に設立された国際組織であるMaaS Allianceは「MaaSとは、いろいろな種類の交通サービスを、需要に応じて利用できる一つの移動サービスに統合することである」と定義していますが、海外においても各国の事情により様々な交通サービスが存在しており、技術の進歩に合わせて日々新しいサービスが生まれています。

我々の生活において、パソコンやスマートフォンで電車やバスの時刻表を検索したり、タクシー、カーシェアリングの予約を行ったりすることは、もはや珍しいことではありません。MaaSの世界では、これらのサービスにAIやオープンデータ、自動運転など先端技術を組み合わせ、複数のサービスを最適な形でつなぎ合わせるとともに、情報収集・検索から予約、支払いまで全て完結させるなど、個人の利便性が更に向上することが考えられます。また、都市部の渋滞の解消や、公共交通機関の運営効率化による収益向上・維持確保、CO<sub>2</sub>削減に伴う環境問題の改善などが期待されており、地域の観光施設と連携することで地方創生にも貢献できると考えられています。

現在は、鉄道会社や自動車メーカー、IT企業等が、各地域でMaaSの実証実験を行っていますが、今後は乱立するサービスをどのように統合し、国民にとって真に利便性の高いサービスが提供されるかが、MaaS普及の鍵となります。また先日、大手自動車メーカーが、人々の暮らしを支えるあらゆるモノやサービスがつながる実証都市「コネクティッド・シティ(スマートシティ)」のプロジェクトを発表しました。このような新しい取り組みを通じて、自動運転を始めとする法制度の整備や規制緩和などが一気に進展する可能性があり、今後の動向が注目されています。

人口減少が進む日本において、MaaSをはじめとするモビリティ・イノベーションが社会に広く普及し、社会課題の解決と地域経済成長を同時に実現することで、デジタル革新と多様な人々の想像・創造力によって創られる新しい社会「Society5.0」が現実のものとなり、人々の暮らしをより豊かにしていくことでしょう。

(政策調査部 次長 丸山 雄平)

## 編集後記

やはりこの話題に触れないわけにはいかない。新型コロナウイルスによる感染症のパンデミック。本当にアッという間もなく世界中で拡大し、いまだ進行中でピークも見えてない。3月下旬から多くの国で外出制限、都市の封鎖が実施されており、世界中で4月がヤマ場とされている。感染拡大防止に向けてできることを実行していきたい。

日本では3月から4月は年度替わりの時期だ。卒業、入学の時期であり企業の決算期も3月に集中している。この時期は多くの人にとって、それまでの生活に区切りをつける時期である。日常であれば卒業式、入学式、入社式が各地で執り行われ、卒業生、新入生、新社会人だけでなくそうした方々を送り、迎える側も気持ちを新たにすることの多い時期だ。ところが今年はそうしたイベントの多くが中止であったり、規模の縮小、内容変更追い込まれている。感染拡大防止が最優先であり仕方がないとはいえ、関係者の方々の思いを考えるとなんとも言えない気持ちになる。

4/1、今年は多くの企業で入社式が中止になったり、Web、ビデオ入社式に変更されたというニュースがあった。考えてみればこうした入社式は新卒一括採用がメインの採用形態だからこそそのイベントと言えるかもしれない。今はVUCAの時代、今後はジョブ型採用や中途採用がますます拡大し、採用方法の複線化が確実に進むと思われる。そうすれば入社タイミングはバラバラ、一度退職してまた入社なんてこともあるだろう。何十年か後には4/1の入社式という言葉自体が20世紀の遺物扱いされるようになっていくかもしれない。とはいえ同期という存在がなくなるのは寂しいが…。(H.S)